

やさしい石 ～「うまれてくる」ことと「つくる」こと～ (1)

樋口恭一の肩書きは、石彫家である。
彫刻家を名乗っていない。

アーティストとしての活動が現代の機能のシステムに巻き込まれてしまうことに疑問をはさんだ時から、彫刻家ではなく石彫家という肩書きを用いるようになった。

ここに樋口の石に対しての、そして美術界のコマースリズムにたいする制作者としてのスタンスがある。

石はもともと大地とともにある根源的なもの。その素材をもとに同一の地平で作品を生み出そうとしているのだという態度からの発想と言えるのかもしれない。

確かに石の研磨を繰り返したり、特殊な技術を要するような煩瑣な細工をするわけではない。鉄粉を塗り込めるという新しい手法はとるが、道具こそ違え、石を割り、その割った素材を組み合わせるといういわば伝統的な技法を援用するだけではある。

樋口恭一は大学を卒業後、専門学校講師をしながら国画会に所属し作品を発表していた。ポーズをかえこそすれ、その中心となるものはひとがたで、石から人間を彫りおこしていた。自ずと人体を表現するため、また、まろみを帯びさせ、ひとがたのイメージをうみだすために石は磨かれもした。作品に付随的な要素は加わるものの、その後もひとがたは中心を占めていた。

そうした作風が一変する。1993年のことである。

その契機を樋口はこう語る。

都幾川村での石の素材の掘り出しの時だったという。

作業に時間がかかり、陽も落ちていた。周りに誰もいない作業場では月だけがその作業を見守っていた。その時である。割られた石の裂け目が月に照らし出され、そこには明確な陰影を映し出す、手を加える必要のない見事に完成された無垢な石の形があった。

思わず「これだ！」と叫んでいた。その昂ぶる想いを友人に伝えようとおもわず近くの電話にしがみついていた。その時の出来事を語る樋口は、遠くを澄んだ眼でみつめる。

それからである。ひとがたが作品から消えたのは。彫刻奨励賞も受賞し具象彫刻を究めていくと思っていた周囲のひとは樋口の変化をどうしてかと訝り、詰問していたという。

団体展から身を退いた樋口はその後、個展、コンクールを主体に発表を続けることとなる。



phot by K.Matsumoto



phot by K.Matsumoto

やさしい石 ～「うまれてくる」ことと「つくる」こと～ (2)

樋口の作品は大別すればふた通りである。

一つは割り出した石を組み合わせる原始的な形態を彷彿とさせるもの。そこからは原始の生物や古代の構造物を思わせるものも生まれてくる。ときにはどこかで見かけたようなユーモラスな形態も顔をのぞかせ、懐かしい想いをよびおこしてくれるものがある。

2010年の鹿島のコンクールで入選した作品もそうした延長線上にある。

もう一つは〈閉(かん)シリーズ〉。数トンもする城壁をおもわせる大きさのものである。今回の展示室にも異様ともいえる〈閉〉が出現する。〈閉〉とは村里の門、入り口のことである。樋口は父親の郷里でもあり、よく連れて行かれて過ごした信州小諸の懐古園の石垣にいたく惹かれていたという。樋口の〈閉シリーズ〉は、大きな石の組み合わせからなり、当然、圧倒的な存在感を放つが、そこにはどこか懐かしさ、優しさが宿っている。

こうした感興はなぜ湧いてくるのだろうか。

樋口は先の都幾川村での出来事から、制作という行為により、外部から手を下して作品を「つくる」のではなく、制作の痕跡をできるだけ消し、作品が大地から自然に「うまれてくる」よう試みるようになった。

ただ、自然に「うまれてくる」のであれば、表現の主体である自分は不用ということになる。そこから「うまれてくる」ものをどのように「つくる」かという大きな難問が樋口につきつけられることになる。始源から現代へのあいだによこたわる壮大な空間と流れる時の変容。そのなかで制作者、表現者としての自分は石という根源的なものに対し、どう手をさしのべたらよいのかという問い。その結果、はるか太古まで、ときに生命の誕生にまでさかのぼるようなかたちの探求となって原初的なものから誘発されたイメージが私たちの前に現れることになる。熟考を重ね、可能な限り作為的な要素を排しながら、石の表面に鉄粉を塗り込めて手の痕跡を消そうとする手法もこうした思考プロセスからうまれたものである。



phot by K.Matsumoto



phot by K.Matsumoto

古来、われわれは、石という素材に対して不動の意志を觀じ、時には死の霊を重ね合わせ、敬虔な想いを捧げて手をあわせました。石はわれわれにとっては単にものをつくる素材だけでなく、精神をたずさえる特異な媒材にさえなるのである。これは石にかかわってきたもののひとりとして、始源の素材である石に対して用意した樋口の答えなのである。

「石というものはこんなにやさしいものだったろうか。」

初めて樋口の作品を見たときに抱いた印象はいまだに変わらないでいる。